

しかしながら、薩摩切子は明治10(1877)年の西南戦争で完全に途絶えたと考えられている。現在製造されている薩摩切子は、昭和60(1985)年に薩摩切子ゆかりの地、鹿児島市磯で再興されたものである。

## (2) 染織品

現代では、鹿児島県の織物としては、大島紬などが知られているのみであるが、薩摩藩が天保14(1843)年に編纂した『三国名勝図会』によれば、各地で多彩な織物が生産されていた。

|         |  |
|---------|--|
| 鹿児島地区   | 鹿児島：青好・麻絹・絹棧留・絹七子・公素・紗綾・皺紗・素光綢・熨斗目・太織白琥珀、桜島：綿布 |
| 始良・伊佐地区 | 加治木(島津)：紙子                                     |
| 北薩地区    | 鶴田：麻、山崎：麻、宮之城(島津)：麻苧、甑島：麻絹・葛布・棧留・條布・白糸・素光綢・綿絹  |
| 大隅地区    | 花岡(島津)：木綿七子織、小根占：木綿絨                           |
| 南薩地区    | 川辺：條布・白糸、加世田：木綿七子織・木綿天鷲絨・綿布                    |
| 日向地区    | 綾：麻、倉岡：紙子、高岡：紙子、穆佐：紙子                          |

特に、鹿児島城下には10種の絹織物が挙げられており、但書に「精巧の繪帛<sup>おりもの</sup>多し、府下の市坊に織局あり、安永五年建てらる」とあり、安永5(1776)年に織局が建てられたことを伝えている。

薩摩藩における織物産業は、幕末期に近代的な紡績業が推進され、中村紡績所や田上水車館で帆布などの綿布生産が促進されるが、「薩州見取絵図」(鍋島報効会蔵)には、「和泉屋町織物場」が描かれており、絹織物などの生産も続いていたものと思われる。また、『忠義公史料二』によれば、文久3(1863)年、富国強兵を目的に、京都や大坂からの絹布の買入れを禁止し、国産で代用するために紡績局が拡張されている<sup>(12)</sup>。さらに「従来下町に在る三島方の郭内にありしを、更に大門口に引遷し、織工・染工等京坂より傭役し盛大に開かれたり、局名を織物所と名称せられたり」とあって、藩外からの絹布の流入を禁止する一方、新たに大門口に施設を造り、京都や大坂から技術者を雇用して藩内での生産を拡大させた。この施設を「織物所」と命名したとある。

表1をみると、薩摩藩は、反布として羽二重、竜門、八丈縞、丹後縞、布、裏縞、縞、帯地、紺真田、綸子、縹子、紋、縮緬の13種を出品したことがわかり、パリ万博当時も、多彩な絹織物の製造が継続していたことが裏付けられる。

また、薩摩藩の出品リストによれば、琉球産諸品として細上布・紬縞・紺地木綿の織物が出品されている。紬縞とあるのは、沖縄諸島の久米島紬や奄美の大島紬と考えられる。細上布については、薩摩藩の支配下となった琉球では、宮古・八重山などの先島諸島で織られる苧麻を原糸とした上布が藩への上納品となっていた。上納品は藍染めに限定されており、徴収された上布は、薩摩藩によって京・大坂・江戸で販売され、薩摩上布の名で世に知られた。特に藍染めの紺細上布は、高級な夏の衣料であり、武士の夏の正装として、袴や紋付きに薩摩上布の紺縞が流行し、一反4~5両で販売された歴史がある。

一方、表3のグループ4衣類・身に付けるもの(服飾雑貨)部門に「Orimenodjo」とあるのは「織

物所（織綿所）」と理解でき、上記の織物所のことと推測され、クラス 27 に綿・生地・糸、クラス 31 にシルク・生地・糸、クラス 33 にシルク・金銀の刺繍が出品されていることが確認できる。その他、個人からもクラス 27 木綿糸・生地・各種デザイン、クラス 31 タフタ（平織地に横畝のある薄い絹織物）・ダマスク織・錦織・ちりめん・無地の布地・横糸に紙の糸を使った絹の布地・縞子・ビロード・シンプルなビロード・毛の長いビロード・鮮紅色の縮緬・白地に赤縮緬、クラス 34 に糸まり・財布数点・人形数点（衣装を着用）・タバコ用カバン・パイプケース・帽子と靴数点などが出品されており、極めて多彩な出品物が準備されたことが分かる。この表記は、先の表 1 に記載のある日本の呼び名で記された羽二重、八丈縞、縮緬など多種の織物を、より具体的に説明したものと解釈できる。

### （3）金属加工品

先に述べたとおり、薩摩藩からは金属加工品も出品されていたことが『総合カタログ』から判明した。藩営貨幣責任者の「シライシハチザエモン」が、近代貨幣数点、硬貨数点、おもりとはかり数点を、磯の集成館からは、芸術的な青銅作品数点が出品されている。特に、青銅作品については、『カタログ 1』では「銅細工」とのみ記されているが、『カタログ 2』ではより具体的に記載されており、その中には「青銅に金を施した像数点」、「青銅製の動物像数点」、「亀と蛇が水晶の地球と一緒にいる岩」（岩に亀と蛇がいる青銅製の置物に、地球に見立てた水晶の玉を取り合わせた造形物か？）とあり、いずれもブロンズ（青銅）製の芸術性の高い彫刻作品であることが分かる。これらが集成館から出品されていることは、島津斉彬時代の集成館事業における金属加工品は大砲製造などの軍備を目的とした製造物が中心であったのに対し、パリ万博の頃には集成館事業の内容がかなり変化し、幅を広げていたことを伺わせ、工芸品の製作も充実度を深めていたと考えられる。

パリ万博の出品物に結びつく薩摩藩における金属加工の事例として、製鉄技術を挙げるができる。帖佐郷鍋倉村（現始良市）にあった鍋倉製鉄所（帖佐鉄山）は、天保年間（1830 - 44）に創設された在来技術による製鉄所で、喜入・知覧・今和泉・山川の砂鉄を用いて製鉄を行っていた。嘉永 4（1851）年から磯で反射炉製造（集成館事業）が始まるに当たり、上町にあった鑄製方の機能が磯に移され、鍋倉製鉄所で製造された鉄のうち、上質品は集成館に送られて兵器原料となり、低質品は加治木（現始良市）の鍋屋などに払い下げられたという。加治木には鑄物技術が育まれており、同じ鉄を加工する技術が大砲製造に貢献している。反射炉一号炉は嘉永 6 年に完成するが、耐火レンガが鉄とともに溶け出し、地下水が湧き出すなどの状況に陥った。高温を得るためには湿気対策が重要であったことから、一時は鍋を火床に伏せるなどの対策が取られたという。

同年には江戸の鑄物師の鑄銭座職人であった西村道弥が、江戸から招聘されている。西村道弥は、当初、加治木の鍋屋西村某の工場で、島津家伝来の茶釜「八景釜」の複製に当たっていたと言われ、その後、財政を補うための鑄銭事業で活躍した。

幕末期の鑄銭事業は、文久 2（1862）年、薩摩藩主島津忠義が幕府から銅銭鑄造の許可を得て始まる。そこでは、琉球通宝の鑄造が行われ、當百銭（大字）・當百銭（中字）・當百銭（小字）・當百銭（広郭）・半朱銭があった。幕府鑄造の天保通宝の銭文を使用しないこと、領内及び琉球内に

限り通用することなどの条件があったが、天保通宝と琉球通宝は、重さと形がほぼ同じであったことから、薩摩藩は、後に禁止されていた天保通宝を大量に私鑄している。こうした鑄銭技術は、パリ万博における近代貨幣や硬貨などの出品に繋がったと考えられる。

#### (4) 武器・武具

『総合カタログ』によってパリ万博への出品が確認された最も顕著な例は武器・武具であろう。

『カタログ2』には、刀剣、銃、兜と鎧、関連物として鞍と馬具が出品されている。谷山(現鹿児島市)から刀剣を出品している「Namino hira Lioukyas」とは、<sup>なみのひらゆきやす</sup>波平行安のことと考えられる。波平とは、平安末期、薩摩刀の淵源となった波平正国を祖とし、平安時代から幕末まで900年間にわたって連続と続いてきた希有な流派である。波平系の63代目、禁裏御用も務める名工だったのが波平行安(1810 - 1882)である。また、行安は江戸時代最後の当主であり、明治時代に入ると廢刀令にも立ち会った。その作になる刀剣がパリ万博会場を飾ったのである。

また、「Masayoshi」(まさよし)とあって、鹿児島からの出品物として、「柄と鞘に豪華な技が施してある刀数点、刀剣数点、弓、矢、錐付きの銃、銃尾を担いで使用する銃」という説明がある。薩摩刀の系統には、鹿児島<sup>まさよし</sup>の伊地知系<sup>ましよし</sup>に正幸、正良がいるものの、現段階では、パリ万博当時の刀工に、まさよしの名は確認できない。とはいえ、刀剣や弓、矢に加えて銃という多種の武器類が出品されていることから、藩営の武器製造所からの出品ではなかろうか。先に述べた鍋倉製鉄所では、銃鉄の生産だけでなく、山陰地方から招かれた鋼吹職人の手で、たたらを用いた鋼の生産も行われた。これらは刀剣の原料にもなることから、刀剣製造にも用いられ、集成館事業でも刀剣が製造されていたことが分かっている。また、「錐付きの銃」とは銃剣のことではなかろうか。「銃尾を担いで使用する銃」についてははっきりしないが、銃身の長いタイプの銃ではなかろうか。

鎧は数点<sup>きのわき</sup>が出品されており、宮廷御用達の木脇啓四郎の名がある。木脇啓四郎(1817 - 1899)は、嘉永5(1852)年に関東以北の武器調査を行い、安政3年から2年間、薩摩藩領内の調査を行っている。領内の調査は、島津斉彬(1809 - 58)の命によるもので、細工所絵師らによって領内の神社や仏閣の宝物の真写が行われ、木脇もそれに加わっている。木脇家文書の中には、啓四郎が真写した武器や武具の絵図が伝わっている<sup>(13)</sup>。弘化4(1847)年以降、薩摩藩の甲冑製作所の主取(責任者)として、藩主や上級武士の鎧、武具の製作を担当するとともに、小松帯刀などの諸家に入りして、その修復にも当たった。藩の甲冑製作所は、上滑川の末川近江屋敷の前の土地(現在の長田町5番地付近、360坪)にあった。パリ万博に出品された鎧類も、ここで製造されたものであったと考えられる。

#### (5) 樟脳

薩摩藩においては、樟脳は砂糖・樺蝋とともに藩財政を支える重要産物であった。江戸時代初期からヨーロッパに輸出されており、「サツマカンフル」の名で、カンフル剤(強心剤)として珍重された。その樟脳が、グループ5「原材料」のクラス5「森林開発商品」として、木材とともに出品されている。



『日本山海名物図会』<sup>(14)</sup>には、樟脳製法として次のような説明がある。

くすには2種あり、樟は芯が赤黒く香が強い。楠は香が少なく、芯は赤黒くない。大木が多く、腐ると岩となる。樟脳は、樟のかげらを釜で煎じてつくる。釜の蓋は鉢で、釜と鉢の間に土を塗って湯気の出ないようにし、蓋に付着した露が樟脳である。

薩摩産の樟脳製法は、一説に、朝鮮出兵（文禄慶長の役、1592 - 98）により渡来した朝鮮陶工の鄭宗官によって伝えられたという。江戸時代は、樟の木片を蒸留し、蓋の陶器鉢に付着した露として樟脳を取り出す製法が行われていた。その後、鳥津斉彬の時代に増産と品質向上が図られた。

寛永14（1637）年から15年頃にはヨーロッパに輸出されており、「サツマカンフル」の名で、



1 樟をチップにする



2 右の甌にチップを入れ、左の竈で火を焚き蒸留する



3 甌の蒸気を冷やし、樟脳と樟脳油を分離する



4 分離された樟脳（白い結晶）と樟脳油



5 圧搾機で樟脳と樟脳油を完全に分離し、樟脳を取り出す



6 出来上がった天然樟脳

図13 樟脳の伝統製法 協力：内野樟脳製造工場（福岡県みやま市）

カンフル剤（強心剤）として珍重された。

薩摩藩には、樟が豊富に自生していたが、貴重な建材のため御用木となっており、樟脳用には、長く伐株や悪木などが充てられていた。栽培法が発明されるのは、天保 15（1844）年のことである。領内の樟脳は全て藩買入れとなり、その大部分が輸出向となっていた。日蘭貿易においては、樟脳は金銀に次ぐ輸出品であり、元禄 14（1701）年のオランダ商館の輸出向け樟脳の取扱量は、全量が薩摩産であった。江戸前期には、金銀を除いて第一の輸出品が樟脳であり、幕末期も、主要な輸出品であった。

このように、江戸時代は日本を代表する樟脳の産地であった薩摩藩であるが、現代では伝統製法による生産はまったく行われておらず、当時の製造の様子をうかがうことは難しい。そこで、福岡県みやま市にある内野樟脳製造工場の工場見学を行い、その製法をまとめた（図 13）。図 13 - 6 のあるとおり、圧搾機で取り出した固形の樟脳の形で、パリ万博へと運ばれたのではなかろうか。

## （6） 蠟 燭

江戸時代、蠟の実から採れる蠟は、和ろうそくなどに用いられ、薩摩藩をはじめ西国諸藩は蠟の栽培を奨励し、蠟燭の生産・販売を藩の統制下に置いて莫大な利益を上げていた。原料となる琉球蠟（黄蠟）は、1500 年から 1600 年代に中国南方から琉球経由で薩摩に伝わったとされる。また、蠟栽培と製蠟の由来は、天正年間（1573 - 92）頃、<sup>おじめ</sup>彌寝重長が蠟の苗を領地の根占に植えさせたなど諸説あるが、遅くとも寛文 14（1637）年から 16 年頃には、薩摩藩で始まったとされる。

蠟燭の原料となる琉球蠟は、中国から琉球を経て薩摩へと伝わり、その後、製蠟技術は、西日本各藩に広く伝わっていった。

薩摩藩は、蠟の栽培を奨励し、生産・販売を藩の統制下に置いて莫大な利益を上げ、製蠟は藩の財政の一翼を支えた。『山海名物図会』（宝暦 4（1754）年）には、「晒蠟」と題して次のように説明されている。

蠟は黄蠟の木の実である。蒸籠で蒸し、煮立てて臼で搗き、蠟とする。薩摩国、備中国、奥州会津に多く、その外の諸国にもあり、唐からも渡ってくる。さらし蠟は、京都・大坂で右の黄蠟をさらして白蠟としたものである。

精製して漂白した晒蠟（白蠟）の主要産地として、薩摩国・備中国・奥州会津を挙げている。蠟燭は、蠟の実から抽出された「生蠟」と、それを天日にさらした「白蠟（<sup>さらしろう</sup>晒蠟）」に分けられ、パリ万博に出品されたのは、長崎領事館記録に白蠟があり、『カタログ 2』にみえる「植物性ワックス」が白蠟に当たると考えられる。白蠟は、パリ万博を経て明治時代から本格的に海外に輸出され、「JAPAN WAX」の名で高く評価されている。薩摩藩は一足早く、パリ万博に白蠟を出品したことになる。

しかしながら、藩政時代、相次ぐ増産命令と蠟の実の収穫強制が行われたのに加え、他の作物の収穫期と重なることから農業の妨げになるとして、明治に入ると多くの蠟樹は伐採され、生産も急激に下火になった。結果として、現在の鹿児島県では蠟燭の伝統製法はほとんど行われていない。そこで、福岡県みやま市の荒木製蠟合資会社の工場見学を行い、その製法を図 14 としてまとめた。





1 櫨の実を集める



2 分離機で実と房に分け、実を粉碎する



3 溶剤を混ぜて蠟を抽出し、更に溶剤と蠟を分離する



4 生蠟の完成



5 生蠟（写真左）を2ヶ月間、天日に干して漂白する（写真右）



6 溶解して不純物を除去後、型で成形し白蠟が完成（写真は海外向け）

図14 櫨蠟の伝統製法 協力：荒木製蠟合資会社（福岡県みやま市）

現代の伝統製法でも、『山海名物図会』と同様、天日に晒して白蠟が作られている。できたばかりの緑色がかった生蠟をチップ状にして天日に2か月間ほど晒すと白色に変化する（図14-5）。それを溶かして不純物を取り除き、再度、固形にしたものが白蠟となる。

## おわりに

本稿では、パリ万博において薩摩藩が獲得した展示場の位置と、そこに展示された出品物について考察してきた。

薩摩藩の屋内展示場は、そもそも琉球公国として、独立国のような体裁で獲得していた場所が、幕府の抗議により行われた、幕府、薩摩藩、パリ万博事務局の三者協議後もそのままの形で維持されたことから、幕府とその統括下で出品した佐賀藩、商人の区画と通路を挟んで向かい会うように配置され、幕府などよりも広い展示区画を獲得できていたと考えられる。

屋外展示場も同様の事情から、幕府と薩摩藩が中国を挟んで配置される状況となり、三者協議後、幕府と薩摩藩が対等の立場に見えるような状況に拍車をかけたと考えられる。日本国内が倒幕に向けて幕府と薩摩藩の対立が激化する中、パリ万博において、薩摩藩が幕府との対等性を演出したことは、外交的な薩摩藩の勝利と受け止めることができる。

こうした状況の中、出品された薩摩藩の出品物については、これまで長崎領事館記録による目録しか紹介されてこなかったが、パリ万博の帝国委員会が発行した2種の『総合カタログ』に薩摩藩の出品物の全体についての記載があることを確認でき、薩摩藩が世界に向けて紹介した薩摩の姿の全体像をとらえることができた。その結果、「薩摩と琉球の産物」というパリ万博の出品物の特徴を、改めて肯定できることが確認できた。それに加えて、これまで知られてこなかった出品物やその製造場所や責任者などを明らかにすることができた。

パリ万博では、薩摩焼が高い評価を得たことで知られるが、数量は不明であるものの、決して薩摩焼に偏った出品ではなく、パリ万博の展示区分に沿って、当時の薩摩で生産されていたあらゆる工芸品や産物が幅広く出品されていたことが分かった。特に、近代化事業が行われていた集成館事業に関わる人物や組織が出品していることから、単に伝統的なものではなく、海外も意識しつつ近代化の中で製造されていた、当時の最先端の工芸的なものなどが出品されていたことが確認できた。こうした状況からは、薩摩藩が領国内の工芸品や産物を海外への輸出を視野に選定したことが伺えるのではなかろうか。

## 註

- (1) 寺本敬子著『パリ万国博覧会とジャポニスムの誕生』（思文閣出版、2017）
- (2) 『EXPOSITION UNIVERSELLE DE 1867 A PARIS : CATALOGUE GENERAL』 No.1・No.2, Publié par la Commission Impériale ; E. Dentu, libraire-editeur, 1867
- (3) 前掲註1
- (4) 「中井弘からの聞書」（慶応3（1867）年6月付 鹿児島県歴史資料センター黎明館蔵 玉里島津家資料）
- (5) 「略之図 全」・「園園之地見取略図（日本の屋外パヴィリオン）」（慶応3（1867）年3月21日付、『統通信全覧』修好門「徳川民部大輔政行一件五 附仏国博覧会」より、原本：重要文化財 外務省外交史料館蔵）
- (6) 商人の展示場では、江戸柳橋の芸者かね・さと・すみの3名が、茶屋風の日本家で煙草を吸ったり、

茶を点てたりして日本の日常生活を演じた。土間では茶やみりん酒が振る舞われたという。その様子は、フランスやイギリスの新聞紙上にたびたび大きく取り上げられた。(『LE MONDE ILLUSTRÉ』1867年8月31日付／同 1867年9月28日付 など)

- (7) 「野村盛秀洋航日記」(東京大学史料編纂所蔵)
- (8) 「機械ギャラリー：モロッコ・日本」(フランス国立公文書館蔵)
- (9) 「仏岡士江差遣候薩州家展覧物品立書」(『仏国領事宛薩藩出品の覚書』慶応2年9月)／『鹿児島県史』第3巻
- (10) 『EXPOSITION UNIVERSELLE DE 1867 A PARIS : CATALOGUE GENERAL』No.2, Publié par la Commission Impériale ; E. Dentu, libraire-editeur, 1867
- (11) 「英国ミニストルハルリ・ハルクス及同国水師提督薩州侯訪問記」(『忠義公史料』六, 鹿児島県, 1979)
- (12) 「藩内産業奨励」(『忠義公史料』二, 鹿児島県, 1975)
- (13) 『木脇啓四郎描く－幕末・明治の薩摩藩文化官僚の画業－』展図録(鹿児島大学附属図書館, 2013)
- (14) 『日本山海名物図会』三(宝暦4(1754)年, 九州大学附属図書館蔵)

(ふかみなと きょうこ 本館主任学芸専門員)